

【A年】聖霊降臨節第4主日(2021年6月13日)

【旧約聖書日課】イザヤ書 60章19～22節

- 19 太陽は再びあなたの昼を照らす光とならず
月の輝きがあなたを照らすこともない。
主があなたのとこしえの光となり
あなたの神があなたの輝きとされる。
- 20 あなたの太陽は再び沈むことなく
あなたの月は欠けることがない。
主があなたの永遠の光となり
あなたの嘆きの日々は終わる。
- 21 あなたの民は皆、主に従う者となり
とこしえに地を継ぎ
わたしの植えた若木、わたしの手の業として
輝きに包まれる。
- 22 最も小さいものも千人となり
最も弱いものも強大な国となる。
主なるわたしは、時が来れば速やかに行う。

【使徒書日課】

フィリピの信徒への手紙 2章12～18節

- 12だから、わたしの愛する人たち、いつも従順であつたように、わたしが共にいるときだけでなく、いない今はおさら従順でいて、恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい。13あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。14何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。15そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、16命の言葉をしっかり保つでしよう。こうしてわたしは、自分が走ったことが無駄でなく、労苦したことも無駄ではなかったと、キリストの日に誇ることができるでしょう。17更に、信仰に基づいてあなたがたがいけにえを献げ、礼拝を行う際に、たとえわたしの血が注がれるとしても、わたしは喜びます。あなたがた一同と共に喜びます。18同様に、あなたがたも喜ばなさい。わたしと一緒に喜ばなさい。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 60章19～22節

- 19 あなたにとって
太陽が再び昼の光となることはなく
月が夜の明かりとなって
あなたを照らすこともない。
あなたにとって、主がとこしえの光となり
あなたの神があなたの誉れとなる。
- 20 あなたの太陽は再び沈むことがなく
あなたの月は欠けることがない。
主があなたにとって、とこしえの光となり
あなたの嘆きの日々は終わる。
- 21 あなたの民は皆、正しき者となり
とこしえに地を継ぎ
私の植えた若木、私の手の業として
私の栄光を現わす。
- 22 最も小さな者が氏族となり
最も力のない者が力ある国となる。
主なる私は、時が来れば、速やかにこれをなす。

フィリピの信徒への手紙 2章12～18節

- 12だから、私の愛する人たち、いつも従順であつたように、私がいいたときだけでなく、いない今はおさら、恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい。13あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。14何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。15そうすれば、とがめられるところのない純真な者となり、ゆがんだ邪悪な時代にあつて、傷のない神の子どもとなつて、この世で星のように輝き、16命の言葉をしっかり保つでしよう。こうして私は、無駄に走つたわけでも、無駄に労苦したわけでもなかったと、キリストの日に誇ることができるでしょう。17さらに、たとえ、あなたがたの信仰のいけにえと奉仕の上に、私が供え物として注がれるいけにえになつたとしても、私は喜びます。あなたがた一同と共に喜びます。18あなたがたも同じように喜ばなさい。私と共に喜ばなさい。

(新共同訳)

【福音書日課】マタイによる福音書5章13～16節

13「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。14あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。15また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。16そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

マタイによる福音書5章13～16節

13「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられようか。もはや、塩としての力を失い、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。14あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。15また、灯をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家にあるすべてのものを照らすのである。16そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かせなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、天におられるあなたがたの父を崇めるようになるためである。」

黙想のためのノート

次主日聖書日課について

・6月13日「聖霊降臨節第4主日」の日課主題は「世の光としての使命」。「聖霊降臨節」の聖書日課は、もっぱら「聖霊」に導かれる「教会」のあり方や使命について教える使徒書日課および福音書日課から設定される。そこには、「個人」としての信者の生き方や使命(召命)に関する事柄も含まれてくるが、「聖書」がもっぱら関心を向けるのは「信仰共同体に連なる個人」であり、個々人の「救い」は必ず「真に帰属すべき共同体への帰還」として認識されている。この「人が真に帰還すべき共同体」を回復されたのが主イエスであり、「聖霊降臨」によって主イエス昇天後も「教会」がその任務を継承したと自己理解されてきた。

・旧新約を通じて、「光」は、神の威光(栄光)を表すイメージとして多用されている。そこからさらに、救いを象徴するものとしても「光」が用いられる。「光」で象徴されるのは神の臨在であるが、「光」の性質に基づいて、神そのものだけでなく、神に対面する存在が同様に「光」を放つものとして認識される。「光」に対して「闇」が語られる場合、「聖書」には、二つの用法が見られる。第一は、「光」の不在としての「闇」であり、「創世記」1章の天地創造の原初状態として語られるような「闇」である。第二は、「光」に対抗・対峙しようとする存在としての「闇」であり、「善悪二元論」の世界観で知られるような東方思想の影響を受けた用法で、しばしば「悪魔」や「サタン」と結びつけて解釈される用法である。「聖書」に一貫する「神観」は徹底した「一元論」的世界観を追及しており、「闇」の第二の用法は、限定的な用例にとどまっているか、そうでなければ、第一の用法によって修正されている。

旧約日課(イザヤ 60章より)

・「イザヤ書」は、三大預言書の一つで、ユダヤ正典「後の預言者」の第一に置かれている預言書。通常、39章までの前半部(「第一イザヤ」と呼ばれる)と40章以下の後半部(「第二イザヤ」と呼ばれる)に区分して扱われる。前半部は、前8世紀末に南王国の王宮に仕えた祭司・預言者イザヤに直接帰される「預言者」伝承資料に基づくと考えられ、預言集と預言者伝が組み合わされている。一方で後半部は、前6世紀(南王国滅亡・バビロン捕囚～解放・ユダヤ帰還)に預言者イザヤを精神的祖とする「預言者の伝統を継承する集団」によって断続的に発せられた預言の集成であると考えられている。旧約学者の中には、後半部も前8世紀末の歴史上の預言者イザヤに帰すると前提する者もあるが、おそらく「イザヤ書」自体がそのような解釈を求めてはいない。つまり、「イザヤ書」は、「預言者イザヤ」以来の伝統を継承した「預言者集団」全体が「預言」の思想において一致したものであることを提示する意図をもって、あえて、他の各「預言書」の時代を網羅するような特殊な「預言書」として編集・編纂されたと推察されるのである。

・日課箇所は、「イザヤ書」後半部(第二イザヤ)の中でも後半(56章以下)に位置づけられる。ここでは、終末的な時間感覚(人が自分の在世中に経験できるかどうかわからない神のみが知るその時!)の中で、神の救済の最終完成形のイメージが告げられる。太陽や月という陰陽を繰り返す「光」のイメージを現在の現実の世界を表すものとして前提としながら、「そのとき」には永遠不変の滅することのない「光」が現れると語られることで、「そのとき」の根源的な変化が想定されている。「黙示録」21章がこれを援用している。

使徒書日課(フィリピ 2 章より)

・「フィリピの信徒への手紙」は、使徒パウロの書簡の一つで、パウロ自身が開拓伝道して創設した教会に宛てて記された書簡。フィリピの教会に宛てられた複数の書簡をひとまとめに編集したものであると解釈する新約学者もいる。書簡中でパウロ自身が獄中(おそらく牢獄ではなく、監視された家屋での軟禁状態)にあることを示唆しており、「エフェソ書」、「コロサイ書」、「フィレモン書」と共に「獄中書簡」と区分される。

・フィリピの教会は、「使徒言行録」によれば、パウロがアンティオキア教会からの宣教団の一員として行動を共にしていたバルナバと袂を分かち、自ら中心となった宣教団を組織して最初に赴いた地であるフィリピで創設した。フィリピには当時、ユダヤ人の会堂がなく(使徒 16:13)、この町に確立したユダヤ人共同体は成立していなかったと考えられる。その少数のユダヤ人の中でも、女性でありながら商人として自立していたリディアという人物が最初の信者となり、彼女が核となってその後のパウロの宣教活動の財的支援を担うようになったと考えられる。パウロは、コリント教会に対しては自分が一切報酬を受け取っていないと啖呵を切っているが(Ⅰコリ 9 章)、フィリピ教会に対しては支援への感謝を繰り返しており(フィリ 4:10 以下)、特別な関係が続いていたことが推察される。フィリピ教会の献身的な姿勢については、コリント教会に対しても模範にするように語っている箇所がある(Ⅱコリ 8 章)。

・本書簡でパウロは、「内在のキリスト」という視点を強く強調している。それは、「わたしの内に働かれるキリスト⇌神」という意味でも、「わたしはキリストの内にある」という意味でも語られ、その二つのあり方をパウロは特に区別せずに扱っている。おそらく獄中で生死の狭間にあるとの自覚が働いたことが影響していると考えられるが、前提として、「ローマ書」6 章や「Ⅰコリント」12 章などで明示しているように、「洗礼によってキリストと結ばれた」というキリスト者としての自己理解を突き詰めていったものであることは間違いなく、そこに神秘主義的な背景を見る必要はないだろう。

・日課箇所も、そのような「内在のキリスト」観を強く前面に出しており、自分自身のことだけでなく、フィリピの教会の人々にも同様の自己理解をもって日々の生活を整えることを勧めている。

・15 節「神の子」の「子」と訳されているギリシア語は「テクノン」で、中性名詞の「子・子孫」を意味する語。信者を「神の子」と表現する場合は、この語がつかわれることが多い。主イエスを「神の子」という場合は、もっぱら「息子」を意味するギリシア語「ヒュイオス」が用いられており、区別されているとも言える。しかし、弟子たちの教会では、初期から男女の区別なく「キリストと結ばれた神の相続人」と自認されたので、男女共通で用いられる中性名詞の「テクノン」が多用されたと考えることもできる。

福音書日課(マタイ 5 章より)

・日課箇所は、「山上の説教」(5~7 章)冒頭序言の一部で、「八福の教え」と「律法についての基本的教え」に挟まれている。「地の塩」で譬えられる前半(13 節)と、「世の光」で譬えられる後半(14~16 節)に分けられる。後半の「世の光」でまとめられた句節の一部は、共観福音書で共通に伝えられているが、各福音書で置かれている文脈は異なる(マルコ 9:50←「小さな者の一人をつまずかせる者」に対する警句の中に組み込み。ルカ 14:34~35←「弟子として従おうとする者」に対する警句に付加)。

・日課箇所は、「八福の教え」(5:1~12)と同様に、勸告(戒め・命令)としてではなく、宣言として告げられる形式で始められている。ただ最後の句(16 節)だけは、その後の「山上の説教」の戒めを先取りするような勸告の定式を取っており、「山上の説教」全体の構造を解釈する上で一つのヒントになっていると考えられる。すなわち、「山上の説教」は、弟子たちを中心とした追従者(教会!)に向けて告げられているのであるが、まず宣言によって弟子・追従者たちの立脚点となる自己理解が提示され、次いで、その自己理解に基づいて、追従者のあるべき姿(「あなたがたの義」5:20)が戒めとして具体的に告げられるのである。16 節は、いわば両者を架橋する役割を果たしており、「八福の教え」および「地の塩・世の光」の宣言によって示された弟子・追従者の立脚点となる自己理解が、神を「あなたがたの天の父」と呼ぶ神との関係にあることを示す句節となっているのである。

・13 節、14 節で繰り返される「あなたがたは…である(ヒュメイス・エステ…)」の構文は、福音書では他にほとんど現れない表現であるが、「ヨハネ福音書」で特徴的な定型句「わたしは…である(エゴ・エイミ…)」を想起させる響きを持っている。そのような類比効果が考慮されているかはわからないが、ギリシア語では主語となる人称代名詞(「ヒュメイス」や「エゴ」など)を省略しても動詞「エイミ」の人称変化で意味が通じるため、あえて人称代名詞が主語として明示される場合は、主語を強調する構文であると解されるので、この箇所の「あなたがたは…」が特徴的な響きを有していることは確かである。その構文上の特徴を敢えて訳し込めば、13 節「(他でもない)あなたがたが、地の塩なのである」、14 節「(他でもない)あなたがたが、世の光なのである」とでもなるだろう。

・そうであればこそ、これらの句節は、弟子・追従者に付与された「地の塩」「世の光」としての意義を、本人が謙虚にも自己否定してしまうことを許さない「宣言」の形式となっていることが重要な意味を持つ。すなわち、神を「天の父」とする「神の子」としての自己理解は、本人の自己認識や願望の問題ではなく、キリストを通して一方的に付与される弟子・追従者としての焼き印のようなものである。

来週の誕生日 (6月13日～19日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-6 番「つくりぬしを賛美します」(= I 79「ほめたたえよ、つくりぬしを」)は、もともと 17 世紀のオランダ独立戦争の最中に愛唱された愛国歌であったものが米国の収穫感謝祭の歌として英訳され(「We gather together」)歌われてきた讃美歌だったが、歌詞が愛国的すぎるとの批判から、長老教会の信徒 J・コリーが新しい歌詞を創作し生まれた。
- ・21-57 番「ガリラヤの風かおる丘で」(= III 5 番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚昊が曲を付した。
- ・21-393 番「こころを一つに」は、18 世紀ドイツでヘルンフト兄弟団を設立したツィンツェンドルフの作詞。この兄弟団の信仰は、J.ウェスレーにも影響を及ぼした。

21-6「つくりぬしを賛美します」

Wilt heden nu treden voor God den Heere

1. Wilt heden nu treden voor God, den Heere, / Hem boven al loven van harte zeer, / En maken groot zijns lieven namens eere, / Die daar nu onzen vijand slaat terneer.
2. Ter eeren ons Heeren wilt al uw dagen / Dit wonder bijzonder gedenken toch. / Maakt u, o mensch, voor God steeds wel te dragen, / Doet ieder recht en wacht u voor bedrog!
3. Bidt, wakent en maket, dat g'in bekoring / En 't kwade met schade toch niet en valt. / Uw vroomheid brengt den vijand tot verstoring, / Al waar' zijn rijk nog eens zoo sterk bewald!
(Nederlandsche Gedenckclanck, Haarlem, 1626)

English version by J.C. Cory

1. We praise Thee, O God, our Redeemer, Creator! / In grateful devotion our tribute we bring; / We lay it before Thee, we kneel and adore Thee; / We bless Thy holy name; glad praises we sing.
2. We worship Thee, God of our fathers; we bless Thee; / Through life's storm and tempest our Guide hast Thou been; / When perils o'ertake us, escape Thou wilt make us, / And with Thy help, O Lord, our battles we win.
3. With voices united our praises we offer; / To Thee, great Jehovah, glad anthems we raise. / Thy strong arm will guide us, our God is beside us, / To Thee, our great Redeemer, forever be praise.

21-393「こころを一つに」

Herz und Herz vereint zusammen

1. Herz und Herz vereint zusammen / sucht in Gottes Herzen Ruh! / Lassent eure Liebesflammen lodern auf den Heiland zu! / Er das Haupt, wir Seine Glieder, / Er das Licht und wir der Schein; / Er der Meister, wir die Brüder, Er ist unser, wir sind Sein.

2. Kommt, ach kommt, ihr Gnadenkinder, / und erneuert euren Bund, / schwöret unserm Überwinder / Lieb und Treu aus Herzensgrund! / Und wenn eurer Liebeskette Festigkeit und Stärke fehlt, / o so flehet um die Wette, bis sie Jesus wieder stählt!
3. Legt es unter euch, ihr Glieder, auf so treues Lieben an, / daß ein jeder für die Brüder auch das Leben lassen kann. / So hat uns der Freund geliebet, / so vergoß Er dort sein Blut; / denkt doch, wie es Ihn betrübet, / wenn ihr euch selbst Eintrag tut.
4. Halleluja, welche Höhen, welche Tiefen reicher Gnad, / daß wir dem ins Herze sehen, der uns so geliebet hat; / daß der Vater aller Geister, der der Wunder Abgrund ist, / daß Du, unsichtbarer Meister, uns so fühlbar nahe bist.
5. Ach Du holder Freund, vereine Deine Dir geweihte Schar, / daß sie es so herzlich meine, wie's Dein letzter Wille war. / Ja verbinde in der Wahrheit, die Du selbst im Wesen bist, / alles, was von Deiner Klarheit in der Tat erleuchtet ist.
6. Liebe, hast Du es geboten, daß man Liebe üben soll. / O so mache doch die toten, trägen Geister lebensvoll: / Zünde an die Liebesflammen, daß ein jeder sehen kann: / Wir als die von einem Stamme / stehen auch für einen Mann.
7. Laß uns so vereinigt werden, wie Du mit dem Vater bist, / bis schon hier auf dieser Erde / kein getrenntes Glied mehr ist. / Und allein von Deinem Brennen / nehme unser Licht den Schein; / also wird die Welt erkennen, daß wir Deine Jünger seien.

English version

1. Heart and heart together bound, / Seek in God your true repose, / In your love the price be found / Of your Saviour's love and woes; / We the members, He the Head, / We the rays and He the Sun, / Brethren by our Master led, / In our Lord we all are one.
2. Children of His realm, draw near, / Make your covenant stronger still, / From your hearts allegiance swear / Unto Him who conquer'd ill. / If your bonds are yet too weak, / If but fragile yet they prove, / Help from His good Spirit seek / Who can steel the chains of love.
3. Only such love will suffice, / As the love that dwells in Him, / Love that from the cross ne'er flies, / Love that spares not life or limb: / 'T was for sinners He was slain, / 'T was for foes He shed His blood, / That His death for all might gain / Endless life,--the Highest Good.
4. Thus, O truest Friend, unite / All Thy consecrated band, / That their hearts be set aright / To fulfil Thy last command. / Each must onward urge his friend, / Helping him in word and deed, / Love's blest pathway to ascend, / Following where Thou dost lead.
5. Thou who dost command that all / Practice love who bear Thy name, / Wake the dead, new followers call, / Touch the slothful with Thy flame. / Let us live, O Lord, at one, / As Thou with the Father art, / That through all the world be none / Of Thy members left apart.
6. Then were given what Thou hast sought, / In the Son were all men freed, / And the world at last were taught / That Thy rule is blest indeed. / Father of all souls, we praise / Thee who shinest in the Son; / Lord, to Thee our hymns we raise, / Who hast all men to Thee drawn!